

---

# MOON-4 夜叉 4 < 3 0 >

みづき海斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

MOON - 4 夜叉 4 < 3 0 >

### 【Nコード】

N 3 4 2 6 N

### 【作者名】

みづき海斗

### 【あらすじ】

天空には満月。消えた和人と夜叉の姿・・・

夜叉 4 第4部第2話第2章です。

## 2・月夜（がつや） - 2（前書き）

ようやく終わりに近づいてきましたー。

## 2・月夜（がつや） - 2

コン コン

「起きてる？和人。」

ドアの隙間から僅かな光が漏れている事を知り、裕希は小さく声をかけた。

「裕希か。」

和人の声がする。裕希はそつと木製のドアを開いた。

和人は本を読んでいる所だった。

「遅くにごめん。」

パジャマ姿の裕希は頭を下げた。

「いいよ、別に。俺は夜型だから。」

白いワイシャツ姿の和人が微笑して言う。

「どうした、こんな遅くに。」

「・・・うん。」

裕希は俯いて答えた。「和人と九桜との事・・・夜叉に聞いたんだ。」

「・・・そう。」

ややあつて、和人は答えた。

かけていたメガネを取る。

「それがどうした？裕希。」

表情一つ変えずに和人は尋ねた。

「俺」

裕希は思い切つて言った。「例え九桜が復活したとしても、和人と闘つて欲しくない。」

「裕希・・・」

「だって、九桜は和人にとって大切な人だったんでしょ？」

「・・・」

和人は目を伏せた。「いいんだよ、裕希。心配することないよ、お前が。」

「だって………！」

「俺には今、お前や朝子、秀がいる。」

「！………！」

「大切なんだ、九桜とは別の意味でお前たちが」

伏し目がちに和人が答える。「裕希まで『闇』に巻き込むつもりはなかった。出来ればこのまま成城の家に――」

「それは、無し！」

裕希は否定した。「俺にとっても和人や秀さん、朝子さんは大切なんだ。そんな大切な人たちが闘っているのに、自分だけ傍観者気取りなんか出来ないよ！」

「裕希………！」

「和人が考えてる以上に」

あの日、冬の朝母との別れた時の事を思い出しながら、「人は弱くないよ。夜叉も言ってた。伝わらない想いなんてないって――だから、俺も『闇』の力よりも強い力を持つ事が出来る。絶対に逃げないから。それが『運命』だというなら、俺は」

じつと和人を見つめる。「変えて見せる、和人の運命を。俺の運命で。」

「………！」

「今だから言える。和人も秀さんも朝子さんも俺には必要な人なんだ。」

誰一人失いたくない、大切な人なんだ。」

「………裕希。」

和人は机の椅子から立ち上がり、裕希の頭に手を乗せた。「どうしてそんなに必死になれるんだ？」

「『光<sup>ひと</sup>』だからさ。」

裕希は顔を上げ、微笑んだ。「『光<sup>ひと</sup>』だから『闇』を照らす事が出来る。人の身が持つ、優しさや暖かさ。母さんや父さん、そして

今は和人が教えてくれた。」

「うん。」

「だから強くなれるんだ。」

「そうだね。」

和人は裕希の髪を撫でた。「随分と大人になったな、裕希。」

「えへっ!」

裕希は照れた様に舌を出した。「俺がついてるから――なんて、和人みたいなこと言えないけど、秀さん、きつと取り戻してみせよ、俺。」

「出来る? 相手は『闇』だぞ。」

「出来るさ。」

裕希は和人の翡翠色の瞳を見つめ、「人は大切なものを見つけるといくらでも強くなれる。闇の人に比べればほんの一瞬の生命いのちかもしれないけど、だからこそ闇よりも輝く事が出来る。」

「そうだね。」

和人も微笑した。「俺も裕希たちがいるから強くなれるよ。」

満月間近の夜。

和人と裕希は大京町のマンションにいた時のように、同じ部屋で寝た。

このまま時が止まり、そして秀さえ帰ってくれば……  
お互いの心を分かち合いながら。

「来るわ。」

「来るね。」

青年と少女との呟きが……『闇』の片隅から聞こえてきた。

「何か飲もうか。」

1階のリビングで白いエプロン・ドレス姿の朝子が裕希と早坂に

声をかけた。

裕希は、

「ミルク入りキリマン！」

元気良く手を上げ、早坂は申し訳なさそうに、

「じゃ、俺はブラックでお願いします。」

ペコリ、と頭を下げた。

「OK。じゃ、2人とも待っててね。」

朝子は新聞をテーブルに置き、カウンター・キッチンへと向かった。

裕希は何気なく雑誌を広げた。

そこには、『MONA』の和人の写真が載っていた。

（朝子さん、ここまで持ってきて来てるんだ。）

「不破和人かい？」

早坂が傍らから、その雑誌を覗き込む。

「うん、そう。和人が初めて秀さんのモデルをやった時の。」

視線を右下にやる。そこにはカメラマンとしての秀の略歴とコメントが載っていた。

「秀さん……」

裕希は寂しげに目を伏せた。

（今頃、どうしてるのかな。本当に、桜の言いなりになっているのかな。）

そこへ、朝子が飲み物を持って来た。

「もう、夜も遅いからアメリカンにしたわよ。」

につこり、と微笑んで朝子が言う。

「ありがとう、朝子さん。」

裕希は雑誌片手にアイス・コーヒーを口にした。

「すみませんね、居候みたいな感じで。」

早坂が髪をかき上げながら、「一応、裕希くんの叔母さんから彼のSPを任されてるんで。」

ブラックのキリマンを受け取る。

「気にしなくていいわよ。大勢の方が楽しいじゃない、ね、裕希くん。」

「うん！俺、賑やかなの大好き！」

月は、満月だった。

グレーのスーツ姿の早坂に視線をやり、裕希は、

（ブラック、よく飲めるなー。）

ぼんやり、と考え雑誌に視線を落とす。

「！・・・」

『朝子のキリマンでも飲んで待ってな。』

（秀さん、あの時！）

「早坂さんっ！」

裕希は隣の早坂をど付いた。

「ぶっ！」

思わず嘔き出しそうになる彼。「どうしたんだ急に、裕希くん。」

「秀さん、俺たちの事覚えてる！」

「え？」

「どうして？」

早坂と朝子が同時に声を発する。

「どういう事だ、裕希くん。」

早坂は裕希の視線を受け止め、

「新宿で秀さんに襲われた時、帰り際に秀さん『朝子のキリマンでも飲んで待ってな。』って言ったんだ！」

「本当？」

朝子の顔が明るくなった。「じゃ、桜にかけられた術は『完璧』なものじゃないって事？」

「かもしれない。」



裕希は制服姿で、強く頷いた。「きっと何かの反動があれば、秀さん、俺たちの所へ帰って来てくれるよ。」

「それなら」

コーヒーカップを置き、早坂が立ち上がる。

「その事を不破和人や夜叉に知らせなくちゃ。」

「そうだね！」

裕希も立ち上がり、「ちょっと和人の部屋に行つて来る。」

「ええ。」

そんな2人を朝子は見送った。

コン コン

木製のドアを開くと同時に、

「和人！秀さんね・・・・・・」

しかし、そこには彼らの姿はなかった。

「和人？」

裕希が呟く。

「どうしたんだ、2人共。」

早坂が小首を傾げる。

その2人の前には、大きく開け放たれたバルコニーへと続く窓。

白いカーテンだけが、夏の夜風に揺れていた。

「・・・・・・もしかして」

そのバルコニーから覗くのは、満月。

「早坂さん！」

裕希は振り返った。「きっと和人と夜叉は新宿へ行つたんだ！」

「何！？」

「桜との決戦だよ。」

早坂の目の前で、裕希は目を細めた。「夜叉と一緒に、桜の所へ行つたんだ。」

「追いかけよう。」

早坂は裕希に言った。「君が言う通り尾崎が記憶を少しでも取り戻しているのなら、桜っていう子から彼を救い出せるかもしれない。」

「うん！」

裕希は頷き、早坂と共にリビングへ戻った。

「どうしたの？2人とも血相変えちゃって。」

朝子が彼らを出迎える。

「朝子さん、車出して！」

裕希が言う。「和人と夜叉、新宿へ行っただ！」

「え！」

朝子はソファから立ちあがった。「本当なの？裕希くん。」

「夜叉もいない。」

早坂が、「この様子だろ、2人で桜との決着を付けるつもりだ。」

「尾崎を救って。」

「判ったわ。」

朝子は、ガラス張りのテーブルの上にあった車のキーを掴み、「地下に車があるから、すぐ出せるわ。付いて来て！」身を翻し、リビングのドアを開いた。

「行こう、裕希くん。」

「うん！」

2人は、彼女の後を追った。

## 2・月夜（がつや） - 2（後書き）

ご感想をお待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3426n/>

---

MOON-4 夜叉 4 < 3 0 >

2010年10月9日19時30分発行